

嘘も方便

桑原 正紀

表現の媒体としての〈ことば〉はいかにも心許ない。そのことが自分の思いや感覚にマッチしているか、そしてそれが他者にしっかりと伝わるか、日常の会話からして私たちは常に不安や迷いを感じながらそれを使っている。短歌や俳句のような短い詩形では、いっそう細やかな気配りが要求される。そこには完璧という到達点はないと言っている。たとえどこかに発表したものであっても、時が経つと作者としてはいろいろな不満が生じてくる。歌集などにする段階でまた手を入れることがよくある。

著名歌人の全集にはたいがい初出作品も収録しており、これと歌集収録の作品とを比較してみるとなかなか興味深い。ことばがどう練られていくか、その痕跡から学べることがたくさんある。宮柊二の例で見よう。

昨夜ふかく酒に乱れて帰りこしわれに喚きし妻は何者

『晩夏』

たいへん有名で人気のある歌のひとつだが、初出の形は

かなり違っていて次のようになっていた。

昨夜深く酒に乱れて帰りこしわれにわが妻わめきしは何
何
〔多磨〕昭和23年4月号

この初出作品では下句が「われにわが妻わめきしは何」となっている。「私に向かってわめいた私の妻、あれは一体なんだったのだろう」というわけで、初めて触れた妻の怒りの言動に戸惑いを覚えていることは伝わるが、「われ」と「わが」の連なりが少し煩いし、「わめきしは何」では意味的にも揺れが生じる可能性に気づいたのだろう。それを「われに喚きし妻は何者」とすることで、なにやら別の人格をそこに見たような驚きが明確に起ち上がってくる表現になった。これぞ推敲といった感じがする。

なお、余談めくが、この歌について宮英子氏のエッセイ集『雁信片々』に興味深い記述（講演記録）がある。英子氏が、私は声を荒げたこともない従順な妻なのにあの歌はひどいじゃないですかと言うと、柊二は「詩的現実」という言葉を使って逃げたというのである（『詩的現実』）。

このエピソードからも柊二の作歌の秘密が伺える。制作や推敲の課程で作品がリアリティーを獲得していくためには、必ずしも〈事実〉そのものである必要はない、という考えがそこにはある。私たちも日常的に「嘘も方便」ということばを使って人間関係の円滑化を図るが、短歌の推敲もそれに似たところがあるようだ。